

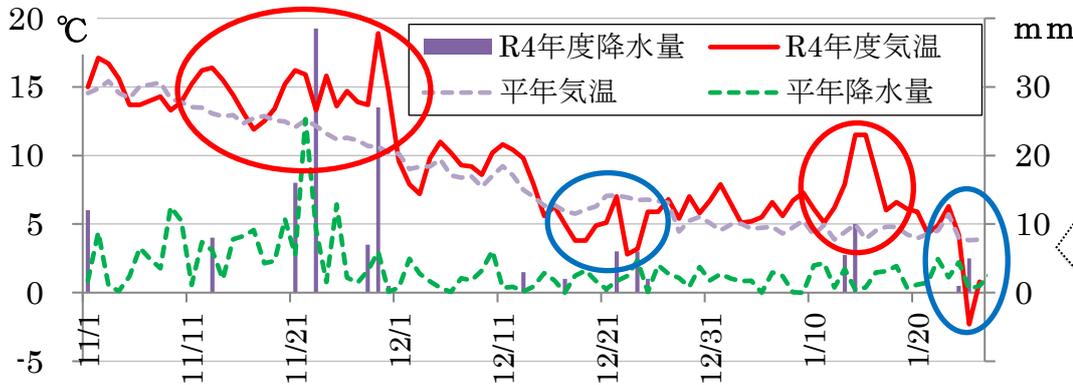
# 水田たより 2月号

令和5年2月1日

JA みえきた

桑名地域農業改良普及センター

## 気象概要と麦の生育状況



11/1~1/26の概況	
◇積算気温	821℃ (平年比 112%)
◇積算降水量	151 mm (平年比 86%)
◇積算日照時間	492 時間 (平年比 108%)

### ■気象概況と現在の生育状況(1月18日~20日 生育基準田調査より)

桑名管内の気象は、11月中下旬、1月中旬に平年より気温が高く（○部）なり、12月20日前後、1月25日頃は強い寒気が押し寄せました（○部）。今後は気温、降水量、日照時間は平年並みとなる見込みです。（名古屋地方気象台1か月予報、R5.1.26発表）

さとのそら、ファイバースノウでは平年と比較して草丈や葉齢がやや遅れています。一方、あやひかりではほぼ平年並みの生育であり、葉色は濃く推移しています。下記を参考に、ほ場をよく観察して追肥をおこないましょう。

## 麦の施肥管理

管内では、近年の積極的な追肥により増収傾向にあります。  
今作においても積極的に追肥を実施し、収量の増加を目指しましょう。

### ■基肥に緩効性肥料(麦エムコート35等)を施用した場合

種類	時期	つなぎ肥	窒素目安量	施用量(N=14%の場合)
小麦	2月中旬まで	無	2~2.5kg/10a	15~20kg/10a
		有	1.5~2kg/10a	10~15kg/10a

小麦は、穂数確保のために2月中旬までに追肥をしましょう。

大麦は、硝子粒による品質低下を防ぐため、2~3月の穂肥は施用しないでください。

### ■分施の場合

種類	内容	時期	窒素目安量	施用量(N=14%の場合)
小麦・大麦	1回目の追肥 (穂数確保)	2月上~中旬 (幼穂形成期)	2~2.5kg/10a	15~20kg/10a
小麦・大麦	2回目の追肥 (登熟歩合向上・ 粒の充実向上)	3月中旬 (止葉抽出始期)	1.5~2kg/10a	10~15kg/10a

※大麦は、施用量が多かったり、時期が遅かったりすると、硝子粒の増加につながります。

生育状況を確認しながら、適期適量の施肥を心がけましょう。

## 水稻前のほ場準備

### ■準備作業について

稲作付けほ場の準備は、稲の生育を大きく左右する要因の一つです。

#### ①深耕

深耕を行うと、作土層が増加し、根域が拡大することで窒素量増加に繋がります。作土層 15 cm を目安に深耕を行います。作土が極端に浅い場合は、複数年かけて作土層を深くしましょう。また、砂質土壌では深耕が漏水の原因になることもあるため、注意が必要です。

#### ②耕起・均平

ほ場の均平を取ると、水位を均一に保ちやすくなり、移植時の苗の水没防止や除草剤の効果が最大限に発揮できるため、整地作業は丁寧に行いましょう。

なお、大豆跡のほ場で、大豆の残渣が地表に残っていると田植えに支障がでます。大豆残渣はしっかりとすき込みましょう。

#### ③畦塗り

畦塗りは、割れ目や穴を塞ぎ、モグラなどが開けた穴からの水漏れを防ぎます。田植えの 1~2 ヶ月前に行いましょう。早く行くと、乾燥して畦にひびが入ってしまいます。畦塗りに適した土壌水分は、手で土を握って、程良く固まる程度が目安です。トラクタで行う際は、ゆっくりと丁寧に作業することで、隙間のない畦を作れます。



畦塗り作業風景

#### ④水口と排水口について

水口や排水口の破損や土が詰まっていないか確認し、田植えの時期に慌てることがないように準備しましょう。水口が機能しないと田植えの時期に水が張れず、適期作業が難しくなります。また、排水口に関しては、スムーズな落水が行えず、浅水管理ができなくなるなどの問題が発生し、雑草防除や稲の生育に大きく影響を与えます。

### ■土作りについて

耕起の際に、地力を向上させるために土壌改良資材等を施用しましょう。代表的な土壌改良資材である、堆肥やケイ酸資材には、それぞれ特徴があります。ほ場の特徴を鑑み施用を行い、収量増加を目指しましょう。

土壌改良資材等	使用目的	特徴
鶏糞堆肥	早期の窒素補充	窒素の即効性が高いものの、土壌で分解されやすく、肥効は1カ月程度です。春先に施用する場合は、窒素含量を確認し基肥の量を調節しましょう。窒素量が安定するまでに時間がかかるため、施用の際は移植1週間前には行いましょう。
豚糞堆肥	微量元素の補給	デンプンやタンパク質が多く繊維質が少ない飼料を食べており、土壌改良の効果は、牛糞堆肥と鶏糞堆肥の中間的な性質を持ちます。また、窒素が多く含まれています。
牛糞堆肥	土壌の物理性改善	分解がゆるやかで、ゆっくりと効果を発揮します。繊維質が多い飼料を食べているので、土壌の物理性を改善する効果があります。1t/10a程度の施用なら、基肥を減らす必要はありません。カリを多く含むため毎年施用しているほ場では土壌診断を行ってから施用しましょう。
ケイ酸資材	ケイ酸の補給	稲において光合成を促進させ、蒸散により植物の温度を下げ、高温障害を対策し、白未熟粒の発生を抑制します。